

信越ポリマー株式会社 2024年3月期 第2四半期 決算説明会

社長挨拶要旨

社長の出戸でございます。

本日はご多忙中のところ、弊社の決算説明会にご出席賜りまして、誠に有難うございます。皆様には日頃大変お世話になっており、この場をお借りしまして厚く御礼申し上げます。

さて、当期は、半導体産業の需要が第2四半期に入り調整局面を迎え、ウエハー容器の生産は緩やかに減少しました。O A 機器用部品は複合機用ローラの増加により、堅調でした。また、自動車用入力デバイスは自動車産業の需要が戻りつつあり、機能性材料は自動車電動化の拡大を受け、それぞれ堅調でした。加えて、人流の回復によりラッピングフィルムの売上げが増加しました。

この結果、当社2024年3月期第2四半期連結累計期間における業績は、

- ・売上高 534億56百万円（前年同期比9億7百万円の増加）
- ・営業利益 58億83百万円（前年同期比7億60百万円の減少）
- ・経常利益 64億3百万円（前年同期比9億81百万円の減少）
- ・親会社株主に帰属する四半期純利益 46億17百万円（前年同期比4億16百万円の減少）
- ・当期中間配当 1株当たり22円

今後につきましては、5月に公表しました中期経営計画に沿って基盤領域における販売力強化、生産性向上、成長領域における新規需要の取り込みに努めます。

半導体産業は、データ通信網の拡大に伴う中長期的な拡大が見込まれますので、半導体関連容器事業を第一の柱として生産能力の拡大を全力で進め、事業の拡大発展を目指します。また、自動車産業は新エネルギー車への転換や自動運転に伴う新技術の急速な進展が見込まれますので、電子デバイス製品など基盤領域である既存製品を伸ばすとともに、E V向けデバイスや車載電子部品向けとして車載シリコン成形品や機能性材料の新たな需要を獲得し、第二の柱としてまいります。

また、O Aローラ、食品包装用ラッピングフィルム、機能コンパウンドなど成長を支える基盤領域の製品は市場シェアの拡大や独自製品の市場投入などによりさらに強固な基盤にしていまいります。

今期の通期連結業績予想は、

- ・売上高 1,110億円（前年同期比2.5%の増加）
- ・営業利益 130億円（前年同期比2.0%の増加）
- ・経常利益 130億円（前年同期比0.1%の増加）
- ・親会社株主に帰属する当期純利益 90億円（前年同期比5.5%の増加）

また、通期業績予想を踏まえ、今期の年間配当予想を 1株当たり44円とさせていただきます。

信越ポリマー株式会社 2024年3月期 第2四半期 決算説明会 質疑応答要旨

日時	2023年11月8日(水) 14:00~14:45		
開催形式	ウェビナー(ライブ配信)		
登壇者	・代表取締役会長	会長執行役員	小野 義昭
	・代表取締役社長	社長執行役員	出戸 利明
	・取締役	常務執行役員	菅野 悟
	・執行役員	営業本部長	小林 直樹
	・執行役員	経営企画部 経理部 部長	小和田 収
	・執行役員	営業第三部 部長	山本 和彦

<全社>

- Q1.** 運賃の下落により販売管理費が減少したと伺ったが、1Qは前期並みだった。販売管理費が1Qから2Qで約3億円減少しており、下期にこのまま運賃の下落が続く場合、御社の業績にとってプラスの影響があると思うが、この辺りを教えていただきたい。また、2022年度の運賃が高すぎだったのか、現在は下げ止まっているのか教えていただきたい。
- A1.** 前期は輸送費として海上運賃だけでなく、航空便の負担も大きかったが、これらが一服し、通常の輸送体系に戻り、且つ輸送単価も下がっている。これらの理由により2Qは販売管理費が前期比で減少した。前期は運賃が高騰しており、現在は下げ止まっている。

<電子デバイス事業>

- Q1.** 電子デバイス事業の車載製品について、日系自動車メーカーは回復してきているが、欧州、米国、中国ともに回復が遅れている。この先の自動車産業の環境について御社が持たれている印象を教えていただきたい。
- A1.** 当社は日系自動車メーカー向けの販売比率が高いため、足元は好調である。自動車産業全体では欧州メーカーの回復が遅れており、米国メーカーは緩やかだが回復しつつある。中国では足元で急速にEV販売が伸びており注目している。全体では今期に入り車載関連製品は緩やかな回復基調にあると考えている。
- Q2.** 2022年度は3Qの売上げが約68億円、営業利益が約6億で、4Qから落ち込んだが、自動車産業がこのまま順調に回復すれば、下期の業績は前期比で増加しそうだが、その考え方で良いのか。
- A2.** 下期以降、自動車販売がこのまま順調に回復すれば、前期と同レベルの業績となると考えている。

<精密成形品事業>

- Q1.** 半導体関連容器の事業環境について、1Qと2Qの状況および下期の事業展開を教えていただきたい。
- A1.** 2Qと比較すると1Qは好調だったが、今後の見通しとして、各お客様より稼働率が上がってきそうだという情報をいただいているが、半導体業界全体では調整局面という捉え方をしており、下期および来期は現状維持もしくは若干弱含みとみている。

- Q2.** シリコンウエハーの生産量が減ったとしても、在庫が解消されなければ、出荷容器はデバイスメーカーからウエハーメーカーへのリユースボックスの返却量が増えず、御社としてマイナスの影響を受け辛いのか教えていただきたい。
- A2.** おっしゃられた状況は現在の環境としては有り得るが、個々のお客様の内部情報のため数値的には把握していない。
- Q3.** シリコンゴム成形品の一般成形品とメディカル製品について下期の需要動向を教えていただきたい。
- A3.** メディカル製品は季節要因による大きな増加はなく、下期は現状維持とみている。一般成形品は、積層セラミックコンデンサー生産用治具の比率が大きいですが、これは徐々に回復しており、3Qの販売は多少回復するとみている。

<住環境・生活資材事業>

- Q1.** ラッピングフィルム事業において、外食産業の回復に伴い小巻ラップの販売が回復している。以前よりカラーラップや抗菌ラップを販売しており、今回バイオマスラップを上市予定だが、今後の見通しを教えていただきたい。また、他社製品と差別化できる点を教えていただきたい。
- Q2.** 当社のラッピングフィルム事業はキッチンスタ社の編入によりラップフィルム業界において大きな競争力を持った。足元は人流回復の影響もあるが、特にカラーラップの販売が前年比 120%と伸びている。付加価値を持った製品が伸びており、今回のバイオマスラップなど新規製品により付加価値の高い製品を市場に供給して伸ばしていきたい。また、現在当社の東京工場とキッチンスタ社の筑西工場で生産しているが、生産場所を一本化して効率を上げるべく取り組んでいる。
- Q2.** バイオマスラップの原材料や販売戦略を教えていただきたい。
- A2.** バイオマスラップはキッチンスタ社の筑西工場で来春から生産を開始する予定だが、植物由来の原料を 10%以上配合することにより、日本国内のラッピングフィルムでは初めてのバイオマス 10 認定製品となり、SDG's に資する製品として着実に伸ばしていきたい。
- Q3.** 機能性材料では導電性ポリマー以外に成長が期待できる製品を教えていただきたい。
- A3.** 導電性ポリマー以外では EV 向けシリコンカーバイドを使用したパワー半導体に対応した薄膜耐熱フィルムを開発しており、2025 年の実績化を目指している。
- Q4.** 塩ビパイプ事業から撤退したが、住環境・生活資材事業の事業ポートフォリオについて、事業の比率、機能性材料や機能性コンパウンドでどのような製品の伸びが期待できるかなど中長期の展望を教えていただきたい。
- A4.** 当社事業における塩ビパイプ事業の比率は高くなかったので、撤退による影響は軽微と考えている。ラッピングフィルム事業については、3 年前に買収したキッチンスタ社が販売する外食産業向け小巻ラップの需要が回復しており、工場の集約などによりこれを強化していく。機能性コンパウンドは EV 向けに低摩擦部材のニーズが出てきており、製品構成を高機能で付加価値のあるものへとシフトしていく。

以上